

空間の現象学にむけて：
フッサールによるカント超越論哲学の改造

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-11-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浜渦, 辰二 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00006867

空間の現象学にむけて

——フッサールによるカント超越論哲学の改造——

浜 渦 辰 二

はじめに

ではいったい空間とは何でしょうか。だれも私にたずねないとき、私は知っています。たずねられて説明しようと思うと、知らないのです。——⁽¹⁾

空間はさておき、時間⁽¹⁾について言えば、アリストテレスが『自然学』において展開した時間論とアウグスティヌスが『告白』において展開した時間論は、時間を論ずる際の根本的に対立する二つの考察方法として、しばしば対比的に考察されている。では、空間⁽²⁾については、この両者においてどのように考えられているのだろうか。アリストテレスが『自然学』第四巻において時間を論ずるのに先立って、同じ第四巻の冒頭で（近代哲学流の言い方で言えば）空間論⁽³⁾を、しかも時間論とパラレルな仕方⁽³⁾で展開しているのに対し、アウグスティヌスの『告白』には、その時間論に重要性において匹敵するような空間論は見当たらない。しかしながら、「はじめに天地を造りたもうた」という聖句に向けられた「それでは、天地を造る以前は？」という疑問に対して答えようとするところから、アウグスティヌスは「時間とは何か？」という問い

にぶつかったのであるが、もしも、彼が同様にして「それでは、どこに天地を造ったのか？」という疑問を向けられていたとしたら、「空間とは何か？」という問いにもぶつかつていたかも知れない。そのとき彼は小論冒頭のような一節を書いていたかも知れない、と想像するのは無駄なことではあるまい。実際、アリストテレスも、ヘシオドスが天地生成について「すべてのもののうち、最も初めに混沌が生まれ、そのつぎに胸幅の広い大地が……」と記しているのを捉えて、そこで「混沌（カオス）」と言うのは「場所（トポス）」のことであり、それは「なにももの存在するにも先ず第一に必要なのは空間（コーラ）の存すること」を意味していると述べ、それがほかの事物が存在するための前提となつていて考えていた。時間に劣らず空間もまた、「私たちが会話のさい、親しみ深く熟知のものとして言及し、それについて話すとき、私たちは理解している（と思つている）」し、他人が話すのを聞くときも、たしかに私たちは理解している（と思つている）」にもかかわらず、いざ、「それは何か」とたずねられて説明しようとする、答えに窮してしまふもの、と言えはしないだろうか。時間に劣らず空間もまた、すべてのものがそのうちで初めて生起しているようなもの、すべてのものに先立ち、それらを初めて可能にしているもの、言い換えれば、ふつうわれわれがそれに問いを向けることなく、あたりまえ（自明）のものとして前提し、その上に立つて初めて諸々の事物について語つていふような基盤、であるのではなからうか。

ところで、時間・空間に限らず、ふつうの人にとってはあたりまえ（自明）のことに、ことさら「驚き（タウマゼイン）」の念をもち、それに問いを向けようとするところに哲学する（知を愛する）という営みの起源があつたことは、プラトンとアリストテレスが口を揃えて述べていたことであつた。時代ははるかに下り、現象学の創始者フッサールは、『論理学研究』第二巻において既に次のように述べていた。「哲学者はまさに《自明なこと》の背後に最も困難な諸問題が隠れていることをも当然承知していなければなるまい。逆説的ではあるが、しかし深い意味をこめて、哲学とは平凡な事柄（トワァリアリヤ）についての学であると言えさるほどである」(LU. II/1, 341ff)。彼が自然的態度に対する現象学的還元という思想によって、あ

るいは超越論的現象学という構想によつて考えていたことも、その核心においては、この本来の哲学の精神と別のことではない。⁽⁸⁾ 自然的態度とは「自然に実践的に経過する人間生活全体の遂行形態」(VII, 234)⁽⁹⁾ のことであり、それを特徴づけているのは、どのような問いをも免れながらも生の根底にあるような前提のもつ「自然性」と、この自然性から生まれる「自明性」である(1bid.)。この自然的態度においては「匿名的」に機能している「隠れた構成的能作」(I, 84; VI, 96)を明るみにもたらずことこそ、超越論的現象学の課題とされたのである。彼にとつて哲学とは、自然的態度にあるふつうの人にとつてあたりまえのこと(「自明性」)を否定することでも、覆すことでも、除去することでもなく、その「自明性」(Selbsterständlichkeit)を理解(Verständlichkeit)にもたらずこと」(VI, 184)に他ならず、現象学的還元とはそのための方法に他ならなかつた。⁽¹⁰⁾ そうであるならば、そして前述のように、時間・空間がふつうわれわれがそれに問いを向けることなく、自明のものとして前提されているような基盤であるとする、これらは優れてフッサールの超越論的現象学が自らの課題とすべきものと言わねばならない。

さて、このようなフッサール現象学の理解に立つて見るとき、現代の精神病理学者ブランケンブルクが著した『自明性の喪失——分裂病の現象学』は、それを搦手から支持してくれるものとして、非常に興味深い考察である。現象学と精神医学との繋がりは早くから見られ、⁽¹¹⁾ 精神医学がフッサール現象学から示唆を得たことについても様々に論じられてきたが、そのさいのフッサール現象学の全体像への理解という点で言えば、勝手に好きなどころをつまみ食いして来たという印象を免れない場合が多かつた。その点、ブランケンブルクの理解は、例えばヤスパースやヒンスワングーラの理解に比べると、⁽¹²⁾ はるかに優れたもの(控えめに言えば、筆者の理解に近いもの)であるように思われる。ここでは、詳しく述べる余裕はないので、重要なポイントだけを指摘するに止めよう。

ブランケンブルクは、この書で取り挙げた患者アンネ・ラウについて、「《あたりまえ》(Selbsterständlichkeit)とじやう

ことが彼女にはわからなかった」と述べる。アンネ自身に語らせると、こうである。「私に欠けているのは何なんでしょう。ほんのちよつとしたこと、ほんとにおかしなこと、大切なこと、それがなければ生きていけないようなこと……。……私に欠けているのは、きつと自然な自明さ(natürliche Selbstverständlichkeit)ということなのでしょう。……私に欠けているのは、きつと、私にとつてわかっていることが、ほかの人たちとのつきあいの中でも——ごくあたりまえに——わかっているという点なのです。それが私にはできないんです」〔強調は原文〕。ブランケンブルクの考察の最も興味深いところは、アンネがここで「自然な自明さ」と呼んだものがどういうレベルの問題として考えられているか、という点である。すなわち、この研究を「ココモン・センス」の病理学¹⁵と呼んでいることにも表されているように、彼は、この「自然な自明さ」を「間主観的に構成された生世界」における人間の根のおろしかたの問題¹⁶として考えている。「自然な自明さ」の喪失とは、「まさにそれが正常にはたらいっているということがわれわれにとつてあまりにも自明に思われるために、ふつうは注意をむけられることがない」¹⁷ようなはたらき、「いつもすでに生起しながらわれわれの日常生活の進路をあらかじめ指し示している匿名の超越論的構成のはたらき」¹⁸がうまく機能していないことであり、そういうものとしての「超越論的機構」ないし「超越論的能作」¹⁹の障碍なのである。

このような「超越論的能作の障碍」としての「自然な自明性の喪失」を究明するにあたって、ブランケンブルクは四つの観点を挙げて、互いに密接に関連するこれらの観点から究明を行っている。それは、A 世界との関わり、B 時熟(Zeitigung)、C 自我の構成、D 他者、という四つの観点である。ここで、自我—他者といった問題は脇に置いておき、時間と空間の問題に話を戻せば、ブランケンブルクは、四つの観点のうちに時間(時熟)の問題を取り挙げているが、空間については特に主題化しておらず、「世界との関わり」という観点においてそれに関連しそうなことにわずかに触れるのみである²¹。しかし、ビンスワンガー、ミンコフスキー以来、「精神病理学における空間と時間」というテーマは関心を集め

てきた領野であり、ブランケンブルクの議論は、空間の問題にまで敷衍されてもおかしくなかつたであろう。

ともあれ、このような障碍の生じた次元としての〈生世界の超越論的・間主観的構成〉というブランケンブルクの構想のなかには、フッサール超越論的現象学の正確な理解を読み取ることができる。²³ 正常に働いているときにはあまりにも自明で注意を向けられることがなく、異常が生じたとき初めてそこで機能していたことが分かるような「超越論的能作」、それはまさにフッサールが現象学的還元によって取り出そうとしていたものであつただろう。このように、精神の病理において障碍が生じているのは超越論的な次元においてである（あるいは、少なくとも、そのような次元において生じる障碍がある）、という仕方では精神病理学の問題を考えると、フッサール超越論的現象学はあらためて精神医学との繋がりにおいて見直されることになるだろう。²⁴ しかし、自然的態度にあるときはそれに眼を向けられることがない超越論的な次元を明らかにするにあつて、それをその喪失・欠如という側面から、いわば擲手から浮き彫りにしようとする、このようなアプローチは哲学的考察にとつてもそれなりの有効性をもっているかも知れないが、²⁵ いまはむしろ、それをたとえより困難であつても正面から明らかにしようとする哲学的アプローチへと目を転じたい。

いま、ブランケンブルクが正しく理解しているフッサールの超越論的現象学を〈生世界の超越論的・間主観的構成〉の考察と捉えたが、フッサールはまさにこうした脈絡において時間・空間の問題を考察しているのである。フッサールは「超越論的」という概念と思想をカントから学びとつてきたのであつたが、時間・空間を「感性の形式」として、また「経験一般の可能性の条件」として、超越論的な問題設定において考察していたカントと比較するとき、同じ「超越論的」という語を使いながらも、このようなフッサールの考察はカントの超越論哲学の根本に関わるような〈改造〉を行つていたように思われる。小論は、そのことをとりわけ空間の問題に焦点を当てて明らかにしながら、ひいては、〈空間の現象学〉にむけて一つの寄与をなそうとするものである。²⁶

- (1) 断るまでもなく、これはアウグスティヌス『告白』第十一卷第十四章の一節をもじったものである(訳語は山田晶訳『世界の名著14 アウグスティヌス』中央公論社、一九六八年に做った)。
- (2) 「トボス」は「場所」と訳される(出隆・岩崎允胤訳『アリストテレス全集3 自然学』岩波書店、一九六八年)。その他、本文中では「空間」とも訳される「コーラ」という語も使われているが、ここでの「場所」論を近・現代哲学流に「空間」論と呼んでしまえるか、にはもちろん問題が残るであろう。
- (3) 場所についての章が、「果たして場所というようものが存在するか否かを、また、(もし存在するとすれば)それはどのような仕方 で存在するかを、また、そのなにかであるかを、知らねばならない」(二〇八 a 二七)という問題提起で始まるのと同様に、時間についての章も、「まず、(A)第一には、時が果たして存在するものどもの部に属するか、あるいは存在しないものどもの部に属するかということ を、そしてそのつぎに、(B)その本性はなにかを、問題として提起するのが適宜な仕方であろう」(二一七 b 三〇)という問題提起から始まる。
- (4) ヘシオドス『神統記』邦訳には広川洋一訳(『ギリシア思想家集』筑摩書房、一九六五年、所収)もあるが、出隆ほか訳(アリストテレス前掲書における引用)に従った。
- (5) アリストテレス前掲書、二〇八 a 二〇以下。
- (6) アウグスティヌス前掲書、同所。引用文中鈎括弧内は引用者による付加。
- (7) 拙稿「他者と異文化」(『哲学年報』第四九輯、一九九〇年)参照。
- (8) これはオイゲン・フントが「Die phänomenologische Philosophie Edmund Husserls in der gegenwärtigen Kritik, in: *Kant-Studien* XXXVIII, 1993 (setzt in: *Studien zur Phänomenologie 1930-1936*, 1966) (新田義弘・小池稔訳「エトムント・フッサールの現象学的哲学と現代の批判」『フッサールの現象学』以文社、一九八二年、所収、四五頁)において強調し(これはフッサール自身による認可と賛同を得たものであった)、「Das Problem der Phänomenologie Edmund Husserls, in: *Revue intentionale de Philosophie*, I, 1939 (setzt in: *op. cit.*) (エトムント・フッサールの現象学の問題)」前掲書、一二二頁)などにおいて明らかに展開した論点である。
- (9) フッサリアーナからの引用は、このように本文中にローマ数字で(ただし、編者序文からの引用には、注のなかで「Hua」という略号と

ともに)その巻数を、アラビア数字でその頁数を指示する。その際、引用文中の強調はすべて引用者による。

- (10) 彼の現象学の展開において、『イデーニー』を中心とする時期の「超越論的主観性」の現象学と『危機』を中心とする時期の「生世界」の現象学とがしばしば対立的に描かれるが、ここで述べたような自明性を理解性にもたらそうとする哲学観を根底に据えてフッサールの現象学を見直すとき、このような図式化は根底からして再考されねばならない、と筆者は考えている(拙稿「フッサールにおける生世界」『文化と哲学』第九号、一九九一年を参照されたい)。しかも、それを描き直すことはとりわけ彼の間主観性の現象学を検討することによって可能となる、という予想も持つている。

- (11) 木村敏「精神医学と現象学」(講座現象学4 現象学と人間諸科学)弘文堂、一九八〇年、所収、荻野恒一「現象学と精神科学」(世界書院、一九八八年)、などを参照。

- (12) ヤスパースについては一九一三年の『精神病理学原論』(西丸四方訳、みすず書房、一九七一年、二七頁、四一頁など)を参照、ピンスワンガーについては一九二二年の講演「現象学について」(荻野恒一・宮本忠雄・木村敏訳『現象学的人間学』みすず書房、一九六七年、所収、特に二二頁以下)を参照。

- (13) プランケンブルク『自明性の喪失——分裂病の現象学』(木村敏ほか訳、みすず書房、一九七八年)六五頁。

- (14) 同書、七三頁以下。

- (15) 同書序、iii頁。

- (16) 同箇所。

- (17) 同書、一〇八頁。

- (18) 同書、一三七頁。

- (19) 前者は三七頁、後者は一四一頁。

- (20) 同書、一三一頁。

- (21) 「自分にはある一定の間、が欠けている……。……この間、こそ健康者にとっては、まわりの世界との結びつきとか、あるいはそもそも一切の拘束性を作り出してくれるものである一方、同時にまた、必要な距離をも保証してくれるものである」(同書、一四四頁)という箇所や「分裂病とはちょうどボール箱を外へ折り返したようなものなんです」(同所)といった箇所には、身体と結びついた空間の問題が垣間見られていると言えよう。

- (22) 宮本忠雄「精神医学における時間と空間」(『異常心理学講座10 精神病理学4』みすず書房、一九六五年、所収)参照。

(23) もちろん、かと言って、それが精神医学にとつて実りあるものになっているかどうかは、別問題である。フランケンブルク自身この書で試みているという、「現象学的人間学」と「臨床的精神病理学」との結びつきが、すなわち、「本質学的な問題設定と事実学的な問題設定とが互いに促進しあう」(同書序、iii頁)という目論見が成功しているか否か、筆者に判断する力はない。その点、例えば、大饗広之「何か欠けている」と悩む分裂病者について——「自然な自明性の喪失」再考——(湯浅修一編『分裂病の精神病理と治療』2)星和書店、一九八九年)や、小出浩之「分裂病者の体験する「他性」について」(『破爪病の精神病理をめぐって』金剛出版、一九八四年、所収)のような臨床の現場からの批判も考慮されねばならないだろう。

(24) 実際、フッサールが問主観性の問題を語る場面で¹⁾はしばしば「病理学(Pathologie)」(XIII, 382)や「正統(Normalität)」(XIII, 384; XV, 33f, 210, 213)と「異常(Anormalität)」(XIV, 67f, 120, 232, 478, 527)や²⁾はしばしば「狂気(Verrücktheit)」(XV, 31f, 154ff)と³⁾と論じていることも、このような観点から見直す可能性があるのではないかと筆者は考えている。

(25) 『知覚の現象学』のメルローポントイは至るところでこうしたアプローチを議論の手掛かりにしている。巻末の参考文献のなかから目についたものだけを挙げて、例えば、Binswanger, Van Bogaert, Fischer, Gelb, Goldstein, Head, Minkowski, Specht, Stein, etc. と、精神病理学関係の文献が多く使われている。

(26) 空間に焦点を当てる理由については次節で述べる。なお、カントと同様にフッサールもしばしば時間と空間をパラレルに論じているので、以下で空間について論ずることはほとんど時間についても妥当すると言えるが、カントの場合と同様フッサールの場合にも、必ずしもパラレルに論ずることができないところがある。しかし、ここではそうした問題に立ち入ることはできない。

一 フッサールによるカント批判

フッサールがカントから学んだことを無視して、フッサール現象学を論ずることはできないであろう。現象学的還元¹⁾の思想が芽生えたのが、「理性の批判」というカント的な問題意識からであったことはよく知られている。現象学的還元¹⁾はしばしばフッサール自身によってもデカルトの方法的懐疑との連関において論じられるが、その本来の発想はむしろカント

的な問題意識から来ていると言つてよい。『イデーニー』に代表されるような、デカルト的な懐疑にならつて説かれた現象学的還元を、後に『危機』のフッサールは自ら「デカルト的な道」と呼び、それは「大きな短所」をもつていたと反省している(VI, 157f.)。この「デカルト的な道」の欠陥を避ける「新しい道」の一つとして、『危機』では「カントの暗黙の前提としての生世界」(VI, 105)から問いを遡らせて超越論的現象学へ向かう「生世界からの道」が説かれているが、それは言うなれば(フッサール自身はそういう呼び方はしてないが)、「カント的な道」(あるいは「カントを越える道」と呼ぶことができたかも知れない。一九二九年パリ・ソルボンヌのデカルト講堂で行つた講演「超越論的現象学入門」に基づいて執筆され、一九三一年まずフランス語版が出版された『デカルト的省察』は、再び「デカルト的な道」を辿つたものであつたが、フッサールにとつて決して満足できるものではなかつた。とりわけ、ドイツの読者を考えて、つまりは、ドイツの哲学の当時の状況——それは、一九三〇年に出版された『イデーニーのための』あとがき²⁾では、「生の哲学、新しい人間学、実存の哲学」の流行と特徴づけられている(V, 138)——を考慮に入れて、大幅に改訂したドイツ語版を構想していたフッサールは、一九三一年フランクフルト、ベルリン、ハレのカント学会での講演「現象学と人間学」を機に、一九三五年のウィーン講演およびプラハ講演を通じて『危機』の「新しい道」へと転じて行つたが、こうした経過を考えると、この「ドイツ語の省察」である『危機』は、『カント的省察』と呼ぶことができたかも知れない³⁾。しかも、この「生世界からの道」は晩年になつて突然姿を現したわけではなく、「生世界」という用語そのものの出現は一九一七年の草稿まで遡ることができるし、『危機』の前身は、「経験の世界の普遍的構造」の記述から出発する一九二六／七年冬学期の講義「現象学入門」(XIV, 393ff.)から、更に「自然的世界概念」の問題を扱い、現象学的還元の間主観性への拡張を論じた一九一〇／一一年冬学期の講義「現象学の根本問題」(XIII, 111ff.)にまで辿ることができるとすれば、この「カント的な道／カントを越える道」は「デカルト的な道」とほぼ時期を同じくして構想されていた、それゆえ、初め「デカルト的な道」を

とつていたフッサールが一九二三／二四年の講義「第一哲学」において突然「デカルトからの離反⁶」を行い「カント的な道」へと向かったというわけではない、と言わねばならないだろう。

また、フッサールがカントから何よりも「超越論的」という概念と思想を学びとり、それを最後まで手離すことなく、むしろそれを深化させ展開していったことも、フッサール現象学を理解するにあたって重要な点である。というのも、現象学的還元思想の中核をなすのは、本質直観に関わる形相的還元よりも、むしろこの「超越論的」な次元を開く超越論的還元とも呼ばれるものであり、そして、フッサール現象学から多くを学びながらも、フッサール現象学の展開を共にすることなく、フッサールから離れていった多くの現象学者——ミュンヘン現象学派、シェーラー、ハイデガーなど——が受け入れることのできなかったのも、この「超越論的」な意味での現象学的還元であり、また、現象学にこの「超越論的」という形容をつけようとするのであった。⁷このことは、今日においても、広い意味では現象学の流れを汲むと考えられる哲学者・研究者の間に、「超越論的」という問題次元を（そこに盛られる意味にさまざまな変更を加えてであれ基本的に）認める言わば「超越論学派」と、それを認めようとしぬ（あるいは、「別の次元」としては認めようとしぬ）言わば「脱・超越論学派」という、現象学派内部の大きな対立を作るものになっていようと思われる。「超越論的」という概念こそ、現象学者達の間に溝を作っているものであり、それはまさにカントから由来する「超越論的」な問題を受け入れるかどうか、受け入れるとしたらどう受け入れるか、をめぐる意見の対立から来たものであった。その意味でも、この「超越論的」という問題は、フッサールがカントから学んだことで無視できない重要なものであるだろう。

しかし、他方で、フッサールがどれほど重要な点をカントから学んだにせよ、それに劣らず多くの点でフッサールがカントに対して批判的だったことも確かである。フッサールがカントを批判する論点は多く、また多岐にわたっている。I・ケルン『フッサールとカント』が挙げているものを見出しだけを主要なものに限って纏めると、

- (1) カントの誤った先入見に対する批判（そのうちに三点が指摘される）、
 - (2) カントの根本的な問題設定に対する批判（そのうちに四点が指摘される）、
 - (3) 超越論的方法という観点からする批判（そのうちに三点が指摘される）、
 - (4) 理性問題の「解決」に関する批判（そのうちに二点が指摘される）、
- という計十二点にわたって挙げる事ができる。しかし、いまこれらの点について個々に詳しく論ずる余裕はない。小論では、特に、カントから学んだ「超越論的」という思想をフッサールはどのように改訂していったか、要するに、フッサールはカントの超越論哲学をどのように改造しようとしたか、という点に絞って、しかも、それが「空間」の問題に関わる限りで考察したい。このような小論の課題にとつて、フッサールのカント批判のうち重要なのは、何よりもまず、『危機』書で中心的なテーマとなる生世界の問題を導入するときに行われる批判、すなわち、「カントの暗黙の前提としての生世界」という批判の論点である（ケルンは(2)の(b)で触れている）。また、それと関連して重要なのは、「内と外」の二元論という批判の論点である（ケルンは(2)の(a)で触れている）、と思われる。これらの論点がどのように重要であるかは、以下順を追つて明らかにして行きたい。小論では更に、それらの論点から浮かび上がつて来るにもかかわらず、ケルンが挙げたりリストには漏れている、あるいは彼が余り注目していない二つの点——それは、第一に身体の問題であり、第二に間主観性（あるいは、他者）の問題である——へと議論を進めて行きたい。

さて、このように超越論哲学をめぐるカントとフッサールの違いを解明するために小論では「空間」の問題に焦点を絞りたいのであるが、それは「空間」問題が両者の違いを解くのに恰好のテーマだと思われるからである。このことは、次のような事情に眼をやれば、既に或る程度は見えてくるであらう。すなわち、現象学的還元思想が初めて芽生えたのは一九〇五年夏スイスのゼーフェルトに滞在した折りであつたことは、その時の思索を伝える「ゼーフェルト草稿」によつ

て知られているが、この思想はまず一九〇六／七年冬学期の講義「論理学と認識論への入門」でおおざと語り出された後、初めて形を整えて論じられたのは一九〇七年夏学期の「現象学と理性批判の主要部」のための序論である。「五講義」（『現象学の理念』）として出版されている）においてであり、また、以前から彼が展開してきた現象学という構想に具体的な姿となって現れるのは、それに続く講義（『物と空間』）として出版されている）においてである。とすると、これらより前に、同じ構想の先立つ部分（「知覚、想起、時間」に関する部分）を論じた一九〇五年夏学期の講義「現象学と認識理論の主要部」から生まれ、その後二十二年を経て、その後の草稿も含めてエディット・シュタインおよびハイデガーの編集によって成った『内的時間意識の現象学』は、そのもともとの部分については現象学的還元⇨超越論的転回¹⁰の思想が芽生えたゼーフェルト草稿に先立つ時期に由来するものである。ハイデガーの『存在と時間』の時間論と異なり、フッサールの『内的時間意識の現象学』にはカントへの言及が見られないが、『物と空間』には肯定的にも否定的にも重要な教箇所でカントへの言及が見られること¹¹も、そのこの辺りの事情を反映していると言えよう。ここで、時間論は超越論的還元なしにも可能だが空間論はそれなしには不可能ということになるのか、それとも、いや時間論のなかにもすでに超越論的還元なしの思想が孕まれていたということになるのか、いまは論議する必要はない。いずれにせよ、一九〇二／三年の講義「一般認識理論」ではまだ、現象学を「記述的心理学」と呼んでいたのに、一九〇三年の書評では「現象学はもはや『記述的心理学』とは呼べない」(XXII, 206) と言いつつフッサールが、やがて一九〇七年には「超越論的現象学」(XXIV, 424f.) という呼び方を使い始めるようになるのは、この時期にカントから学んだ超越論的転回を経ることによってであることは確かである。そしてまた、その転回を初めて克明に分析したのが一九〇七年夏学期の講義であることも確かであり、そして、この転回に基づいて扱われているテーマがまさに「事物と空間」の問題なのである。したがって、空間の問題には、当時集中的に行われたフッサールのカントとの取り組みが（肯定的であれ否定的であれ）凝縮されていたとしても、決して不

思議ではないであろう。空間の問題を小論の課題にとつて恰好のテーマと呼んだ所以である。

フッサールとカントの関係一般について最後に付言しておきたい。フッサールはカントから学んだと言っても、それは批判的に学んだのであり、カントから単に何かを借用したり継承したりするだけでよいとは考えてはいなかった。フッサールは一九〇三年の草稿においてすでに、「カントを正しく利用し、学問の進歩のために実りあるものとする前に、まず、カントの思考世界の体系的な骨組みがまったく壊され、鋭い批判の硝酸(Schneidewasser)によつて完全に分解されねばならない」(VII, 356)と述べていたが、同じ主旨を一九一七年の草稿では、こう述べている。「カントの作品には豊富に金が含まれている。しかし、この金を取り出すには、それをまず破壊し、ラディカルな批判という炎のなかで溶かさねばならない」(XXV, 206)。ここに示されたカントへの態度は、更に、七年後の一九二四年のフライブルク大学でのカント記念講演に基づく論文「カントと超越論哲学の理念」でも揺るぐことはなく、こう述べている。「カントの体系をそのまま受け入れたり個々の点を改善したりすることではなく、カントの革命の究極的意味を理解すること——しかも、先駆者ではあるが完成者ではないカント自身よりも彼をもっとよく理解することが、何よりも必要なことなのである」(VII, 286)。このようなカントに対する姿勢から、当時講壇哲学の主流となつていた新カント学派との違いも鮮明となる。すなわち、同論文でフッサールは述べている。

現象学的な研究者の間がもともとカントや新カント学派のやり方に鋭く対立しているのを感じたとしても、また、カントをルネッサンスという仕方では歴史的に継承し単に改善するという試みをよき根拠をもつて拒否したとしても、……それでも、われわれはあらゆる認識の絶対的究極的前件から体系的に登つていくわれわれの作業の本質的成果において大筋ではカントと一致しているのであるから、彼に学問的な超越論哲学の偉大な先駆者としての榮譽を与えること

が重要である。……しかし、カントを現象学的な眼で見るとは、彼を新たに理解し直すことであり、彼の先を見通す直観の偉大さに驚くことであるが、かと言ってそれは、彼を模倣したり、カント主義やドイツ観念論の単なるルネッサンスを弁護することでは決してない。(VII, 235)

カントから学びながらも模倣するのではなく、批判しながらも拒否するのではなく、解体しながらもその本来の精神を再構築するという、現代風な言い方で言えば「脱構築」というのが、フッサールのカントに対する基本的な姿勢であったと言えよう。一八六〇年にオットー・リープマンが発した「カントに帰れ! (Zurück zu Kant!)」という呼びかけから始まったのが新カント学派であったが、この新カント学派への対抗意識において発された言葉こそ、あの現象学の標語として有名になった「事象そのものへ! (Zu den Sachen selbst!)」という主張であった⁽¹⁴⁾。その言葉のうちには、カントから学びつつも、カントを超えて、事象(あるいは真理)そのものへ向かおうとするフッサールの姿勢が籠められていたのである。それゆえ、このフッサールのカントに対する姿勢についても、古くからアリストテレスのプラトンに対する姿勢について言われた言葉、そして、フッサールがハイデガーの『存在と時間』を読んだあとその扉に書きつけたという言葉、すなわち、*“Amicus Plato, magis amica veritas”* という句を使うことができる⁽¹⁵⁾だろう⁽¹⁶⁾。

(一) Vgl. “Persönliche Aufzeichnungen” (Hrsg. von W. Biemel), in: *Philosophy and Phenomenological Research*, Vol. XVI, No. 3, 1956, p. 297.

(二) 還元の様々な道については、渡辺二郎『危機』と『イデーニー』を結ぶもの(立松弘孝編『フッサール現象学』勁草書房、一九八六年)を参照。

(三) Kern, I., *Husserl und Kant*, 1964, S. 50.

- (4) IV, 374f. Vgl. Welter, R., *Der Begriff der Lebenswelt*, 1986, S. 78f. また、次に「生世界」の概念が出現するのが、一九二四年の論文「カントと超越論哲学の理念」である (VII, 232)。ここで、「生世界からの道」を「カント的な道／カントを超える道」として考察するとき、興味深い。
- (5) 「この一九二六／七年の講義は、一九一〇／一一年の講義『現象学の根本問題』と……彼の最後の作品『危機』の間をつなぐものと見ることができよう」(Kern, "Einführung" in: Hua, XIV, S. XXXI)。
- (6) Vgl. Landgrebe, L.: "Husserls Abschied vom Cartesianismus", in: *Der Weg der Phänomenologie*, 1963.
- (7) 「現象学的還元という方法を、私の古い弟子たちの誰一人として理解する者はなかった」(Husserl / *Brief an Ingarden*, 1968, S. 64)。「ひとびとは、現象学的還元、の原理的な新しさを……理解しなかった」(V, 140)。
- (8) 参考のため、ケルンが挙げている論点を各章・節の標題に従って、整理しておく。
- (1) カントの誤った先入見に対する批判 (§ 9)
- (a) カントには真のア・プリオリ概念が欠けている。
- (b) カントは余りに鋭く感性と理性を分けている。
- (c) カントはノエシスとノエマを混同し、意識のノエマ的側面の区別した研究をおろそかにした。
- (2) カントの根本的な問題設定に対する批判 (§ 10)
- (a) カントはラディカルな認識問題に突き当たっていない／彼の理性批判は「自然的」な世界統握に由来する「独断論的」前提を含んでいる。
- (b) カントの認識の問題設定は余りに高い次元にある／それに先立つてもっと低い次元の問題が展開されねばならない。
- (c) カントの問題設定は狭すぎる。
- (d) カントは自らの超越論哲学を超越論的な自己批判に委ねることをしなかった。
- (3) 超越論哲学的方法という観点からするカント批判 (§ 11)
- (a) カントには現象学還元概念が欠けている。
- (b) カントの後退的―構築的方法に対する批判／カントには直観的―提示的な方法が欠けている。
- (c) カントの超越論哲学には形相的方法が欠けている。
- (4) 理性問題の「解決」に関するカント批判 (§ 12)

- (a) カントの心理学主義という批判。
- (b) カントの人間学主義という批判。
- (9) そこから更に生じてくるもう一つの問題、すなわち、それら全体を通じて超越論性そのものへ再考を迫るものとなる「超越論性の発生」という問題については小論では立ち入ることはできない。
- (10) Vgl. X, 237ff.; Biemel, W., "Einleitung" in: Hua. II, S. VIII.
- (11) 「内的時間意識の現象学講義」はフッサールの真の超越論的転回に先立つ時期に由来する(Seebohn, T., *Die Bedingung der Möglichkeit der Transzendental-Philosophie*, 1962, S. 111)。もちろん、その後の草稿も含めて一九二八年に出版された『内的時間意識の現象学』については、その限りではなからう。
- (12) 『内的時間意識の現象学』の巻には一箇所(X, 252)のみ重要でない言及があるのみだが、『物と空間』の巻には五箇所(XVI, 4, 43, 119, 139, 343)ではあるが、その言及は必ずしも重要なものではない。
- (13) Vgl. Melle, U., "Einleitung" in: Hua. XXIV, S. XX.
- (14) 「*カンテ*に帰れ、*カント*に呼び声——それは、まもなく必然的に、*フイロ*に帰れ、*ヘーゲル*に帰れ、*フリース*に、*ショーペンハウエル*に、*同じ*た同様の呼び声をもたらしたのであるが——は、*うまい*呼び声ではなかった。正しい呼び声は、自由な精神として事象そのもの、*なる*なるべきであらう」(XXV, 206)。Vgl. Kern, *op. cit.* S. 306.
- (15) Schuhmann, K., "Zu Heideggers Spiegel-Gespräch über Husserl", in: *Zeitschrift für philosophische Forschung*, Bd. 32, 1978, S. 612.
- (16) これについては、細川亮一『意味・真理・場所』(創文社、一九九三年、一二七頁)から教えられた。もちろん、フッサールがおそらく自分のハイデガーに対する姿勢を表すものとして書きつけたのであろうこの言葉は、逆に、ハイデガーが自分のフッサールに対する姿勢を表す言葉としてそのまま送り返すものであったであろう(それとも、ハイデガーのそのような姿勢をフッサールは「存在と時間」に読み込んで、そのようなハイデガーの姿勢に敬意を表するつもりでこの言葉をかきつけたのであろうか? 確かに、この言葉が、弟子の師に対する姿勢を表すとすれば、ハイデガーのフッサールに対する姿勢を表現する方がふさわしいとは言える。しかし、その真意は詳らかでない)。

二 経験の可能性と数学の可能性^①

さて、小論の目指すところは、カントの空間論とフッサールの「空間の現象学^②」を比較考察することにあるが、そのために、ここではカントが空間を論ずるさいの枠組みとなつてゐることを取り出した。そこで、まずは、カントが時間・空間を論ずる『純粹理性批判』の「先驗的感性論^③」に焦点を絞ることにする（それゆえ、ここではとりあえず、空間論への準備を念頭におきながらも、空間に限定せず、時間・空間の両方について語られるような次元に留まつて論ずることになる）。

周知のごとく、カントは『純粹理性批判』の先驗的感性論において時間・空間を、「純粹直観」と呼ぶと共に、「直観形式」とも呼んでいる。それでは、両者は同一のものなのか、同じものの単なる呼び換えなのか、それとも、呼び方が異なる以上、両者の間には何らかの差異があるのだろうか。「感性の純粹形式は、また、純粹直観とも称されるだろう」(A200 || B351^④)という文章は、両者の同一性を端的に表現してゐると考えられてきたが、その文脈を考慮するならば、それは同一性よりもむしろ差異性を表現してゐるのではないか、少なくとも差異性を含蓄してゐるはず、と考えることができる。このことは、一般的に、次のよう考えられることから裏付けられよう。すなわち、 $a \parallel b$ (例えば、「明けの明星は、宵の明星である」) は、 $a \parallel a$ (例えば、「明けの明星は、明けの明星である」) とは異なつて、同一性を表現するだけでなく、それと同時に、そのうちに差異性をも含んでおり、差異性を前提にして初めて、同一性の表現となることも可能になる。或るものが a と呼ばれる脈絡と b と呼ばれる脈絡が異なつてゐるからこそ、 $a \parallel b$ を言うことに認識価値があるわけがある^⑤。したがつて、 $a \parallel b$ が、すなわち、いまの場合は純粹直観 \parallel 直観形式が、いったん確認されてしまえば、その後は

a と b はいつでも交換可能となるにしても、 $a \parallel b$ が確認されるまさにその場面（すなわち、先の引用文の場面）では、a と b の差異が前提されていなければならぬであろう。それでは、「純粹直観」と「直観形式」の差異は、どこにあるのだろうか。

何かが「ア・プリアリ（あるいは、純粹）」であることは必ずしもそれが「形式」であることを含意しないし、逆に、何かが「形式」であることは必ずしもそれが「ア・プリアリ」であることを含意しない。カントによれば、「ア・プリアリア・ポステリオリ」とは、言わば起源（源泉）による認識（概念および直観）の種類の区別であり、ア・プリアリとは経験から得て来たものではなく、「経験に依存しない」、その限りで「経験に先立つ」（「純粹」も同様の意味で、「経験的なもの」一切含まない）ということを意味する（A11f. || B11f.）。それに対し、「形式—質料」とは、言わば認識の組成に関する区別であり、例えば、「現象の形式」とは、「現象の多様（「質料」が、或る関係において秩序づけられ得るようにするもの）（A20 || B34）（「」内は筆者注。以下も同様）であり、「直観の形式」とは、「そのもとのみ直観が可能である」（vgl. A23 || B39, A27 || B43, usw.）ものを意味している。従って、純粹直観（ア・プリアリな直観）と直観形式の差異とは、前者においては、それが経験に依存しない、経験に先立つ、一種の直観であるということ（直観の種類）が語られ、後者においては、それが、直観の質料を秩序づけ（形相を与え）、そのことによって、直観を（純粹直観であれ、経験的直観であれ）初めて可能にするような直観の要因であること（直観の組成）が語られていることになる。

このような両者の違いは、それぞれが質料に対してもつ関係に注目するとき、はつきりするであろう。「経験的なもの」含まない（すなわち、純粹）とは、何よりも、経験の質料的要因を一切含まないということであり、純粹直観とは、「経験的直観から感覚に属する一切のもの（「質料的要因」を分離して後に残る）」（A22 || B36）ような直観として規定される。もちろん、質料的要因をすべて取り除いてしまえば、形式的要因のみが残るわけだから、それは、形式のみを含む直観と

言つてもよい。しかし、純粹直観は、それが純粹直観と呼ばれる限り、その形式の形式たるゆえんが着目されているわけではない。それに対し、形式はもともと質料と対をなすものであり、質料を秩序づける（形相を与える）ものとして、絶えず、質料との連関のうちで考えられている。したがつて、直観形式と言われるときには、純粹直観であれ、經驗的直観であれ、それを直観たらしめているものとして、そのような形式の形式たるゆえんが着目されている。純粹直観は、經驗的直観から分離され、それとの区別の側面のみが着目されているのに対し、直観形式は、經驗的直観すらそれによつてのみ可能となる条件として、經驗的直観の形式でもあると考えられる。

さしあたり、それぞれの呼び方の違いに現れている両者の差異を取り出せば、以上のようなことが考えられるであらう。しかし、そこからもう一步踏み込んで考察したい。カントは時間・空間についてなぜこのような二つの呼び方を使ったのか、なぜ二つの呼び方を使う必要があつたのか、そのことを探つていくとき、両者の差異には、以上のようなことに留まらず、むしろ、もっと大きな脈絡（背景）の違いが潜んでいると筆者には思われるのである。そこで、この二つの呼び方が『純粹理性批判』のなかで登場してくる経緯を少し追うことにしたい。

まず、「純粹直観」という語について見てみると、この表現が最初に登場するのは、先に引用した感性論冒頭のくだりであるが、それに先立つて、B版（それゆえ、執筆時期としては後になるが）序論の「数学的判断はすべて、綜合的である」と題された節(B17c)での「直観」（ここでは「純粹直観」ではないが）という語の登場の仕方は重要である。この節での叙述によると、数学的判断は（算術も幾何学もともに）分析的なものではなく、その判断のためには、「概念を越えて外に出る」こと、すなわち、「直観に頼る」ことが必要であり、従つて、それは綜合的判断である。しかし、にもかかわらず、それは「経験からは導き出せない必然性を伴うから」、ア・プリオリな判断であつて、經驗的判断ではない。それゆえ、「五本の指や五個の点のような直観を助けとして」とは言つても、それは經驗的直観の助けが必要だということの意味するの

ではない。数学的判断のために経験的直観に頼らねばならない、という考えは、数学的判断をア・プリアリなものと考えているカントの採るところではないのは明らかである。とすれば、カントがそこで「直観」と呼んでいるのは、何か経験的ではない直観、すなわち純粹直観（ア・プリアリな直観）でなければならぬだろう。ここには、カントが数学的判断を「ア・プリアリな綜合判断」と考えていることと「純粹直観」という言い方の結びつきをすでに見て取ることができであろう。

現に、「純粹直観」という語が登場する第二の場合、すなわち、「空間の形而上学的解明の三」では、「幾何学の原則はすべて直観から、しかもア・プリアリな直観から……導出される」（A25=B39）とカントは述べている。このような、幾何学そして算術、およそ数学と「純粹直観」との結びつきは、『プロレゴメナ』においてはもつとはつきり次のように述べられている。「幾何学の根底には空間という純粹直観があり、算術は時間において単位を順次に付け加えることによってその数概念を成立せしめる。更に、純粹力学は、運動の概念を時間の表象を介してのみ成立させることができる。……空間時間は、経験的直観の根底にア・プリアリに存する純粹直観である」（*Pröl. §10*）。この文章にはつきり表されているように、「純粹直観」という言い方は、ア・プリアリな綜合判断としての「純粹数学はいかにして可能か」という問い（ひいては、純粹数学に基づく「純粹自然科学はいかにして可能か」という問い）の脈絡から出てくるのである。要するに、「純粹直観」という言い方は、言わば「数学の可能性」を問うという脈絡において登場する、と言うことができよう。

では、それに対して、「直観形式」という語の方はどうかと言えば、「形式」という語が最初に登場するのは、先にも引用した「現象の形式」（A20=B34）という言い方においてであるが、それに続いて、「感性的直観一般の純粹形式」（*ibid.*）や「感性の単なる形式」（A21=B35）といった言い方が現れる。つまり、形式は、「現象の」「直観の」「感性の」といった限定とともに用いられるわけである。ところで、カントにとって、認識は、経験的認識（それは、端的に「経験」と呼ば

れる)ですら、直観(感性)と概念(悟性)とが「一つになる(sich vereinigen)」(A51=B75)ことによって生ずる「合成物(Zusammengesetztes)」(B1)に他ならない。してみると、「直観の形式」「感性の形式」は、後に先験的論理学において論じられる「思惟の形式」「悟性の形式」としてのカテゴリーともいまって、「経験一般の形式」(A125, A221=B268, usw.)をなすものとして考えられていることになる。したがって、「直観形式」という言い方は、およそ経験的なものの「可能性の条件」たる「経験一般の形式」を問うという脈絡から出て来ているのである。要するに、「直観形式」という言い方は、言わば「経験の可能性」を問うという脈絡において登場する、とすることができよう。

こうして、「純粹直観」と「直観形式」はおのおの、「数学の可能性」への問いと「経験の可能性」への問いという異なる脈絡から登場して来たことが確認されたわけである。しかし、われわれは果たしてそれらを「異なる脈絡」と呼んでよいのだろうか。少なくともカント自身は、両者が異なる次元にある問いとは考えていなかったように思われる。例えば、カントが、「或るア・プリオリな原理(「空間」)から、他のア・プリオリな総合的認識の可能性(「幾何学の可能性」)が洞察される」(B6)と言うときや、「時空の概念の先験的演繹は、同時に、純粹数学の可能性を説明する」(Prot. S. 12)(強調は引用者による)と言うとき、彼は、「経験の可能性」を説明するア・プリオリなもの(時空)が、同時に、「数学の可能性」をも説明すると考えていることは疑いない。少なくとも、カントは、「経験の可能性」への問いと「数学の可能性」への問いとが重なりうるような所にア・プリオリなものを考えようとしている、とは言うことができよう。

このことは、「数学的判断はア・プリオリかつ総合的」と考えるカントの数学観とも密接に関わっている。「数学的判断は、ア・プリオリかつ総合的」とすることには、様々な難点が指摘されているが、にもかかわらず、そこには(とりわけ、幾何学に関しては)一概に捨て去ることのできない洞察が含まれていることも、また指摘されるところである。⁽⁸⁾幾何学の命題は総合的であって、矛盾律のみによつては証明できず、概念を越え出て、直観に頼らねばならない、というカントの

主張は、現代数学の立場から見れば、一方では、非ユークリッド幾何学の論理的可能性を認めるとともに、他方では、その実在的可能性は否定する、という立場とみなすことができる。⁽⁹⁾ カントは、次のように述べている。「例えば、二直線によって囲まれた図形という概念には矛盾はない。というのも、二直線とその結合という概念は、図形の否定を含んではないからである。その不可能性は、その概念自身に基づくのではなく、その概念の空間における構成(Konstruktion)に基づくのである」(A220=B268)。つまり、「二直線によって囲まれた図形」という概念そのものには矛盾はなく、論理的には決して不可能ではない。そして、その論理的可能性を追求するとき、われわれは非ユークリッド幾何学へと導かれることになる。しかし、カント自らはその道を辿ることはなく、むしろ、それは論理的には可能であるとしても、直観によって構成することができず、従って、実在的には不可能であり、それは「徒に幻想にかかずらうこと」(A157=B196)に過ぎないとする。このようなカントの数学観を現代数学におけるいわゆる「直観主義」の先駆者とみなすことも不可能であるまい。⁽¹⁰⁾

しかし、カントの数学観にはもう少し含みがある。カントにとって、数学において「直観に頼らねばならない」とは、それゆえ、数学は「直観に適用されねばならない」ということ、更には、「経験に適用されることができるのでなければならぬ」ということでもある。純粋数学の根底をなす純粋直観も、経験的直観に適用されてのみ、認識となり得る(B147)のであり、その意味において、「純粋直観すら、その対象を、それゆえ、客観的実在性を持ち得るのは、経験的直観によってのみである」(A239=B298)とも言われる。そのことは、数学のア・プリオリな命題も、現象(経験的对象)への適用においてのみ、その「意味と意義(Sinn und Bedeutung)」(B149, A156=B195, A241=B300, ProI. §8, §12)⁽¹¹⁾を得る、とも表現されている。また、このように、数学について、数学は経験に適用されねばならないと考えるカントは、同時に、それとは逆に、経験については、経験はその根底を数学から与えられると考えているように思われる。まさにその意味に

においてカントは次のように述べている。「経験的直観は、「時空という」純粹直観によつてのみ可能である。従つて、幾何学が純粹直観について言うところは、そのまま経験的直観についても異議なく妥当する」(A165 = B206)。要するに、経験を可能ならしめているものは、同時に、数学を可能ならしめているものでもあるのだから、純粹数学が示すところのものは、経験についても妥当する、というのである。ここには、はっきりと、経験と数学との間の断絶なき連続的な相互乗り入れ的關係が述べられている、と言えよう。

こうして、カントにとって、〈経験の可能性〉を問うことは、〈数学の可能性〉を問うことは、決して異次元にあるものではなく、むしろ、前者の課題に答えることは、同時に、後者の課題に答えることにもなると、両者を重なりうるものとして考えていることがわかる。時空が、一方では、「純粹直観」と呼ばれると同時に、他方では「直観の形式」と呼ばれるという、二重の呼称を与えられたゆえんも、もともと、〈数学の可能性〉への問いと、〈経験の可能性〉への問いが重なり合うようなところで、時空を論じているからに他ならないのである。しかし、〈経験の可能性〉への問いを、〈数学の可能性〉(ひいては、自然科学の可能性)⁽¹⁾への問いと重なり合うようなところで問うことは、〈経験の可能性〉の問いを、更に遡つて言えば、「経験」の概念そのものを或る仕方で制限することにはならないだろうか。そのような制限によつてカントは、「経験」を初めから日常生活における知覚経験としてではなく、そこから引き離された学問的認識として考えることになつたのではないだろうか。実を言えば、それこそ、フッサールのカント批判の一つの論点であつた。そこで、次節では、そのことを確認することにした。

(1) この節は、拙稿「Die Transzendente Idealität von Zeit und Raum bei Kant」(『ティアロコス』第四号、一九九一年)——その前身は、筆者がケルン大学に留学中に、指導教官であつたクレスグス教授に提出したレポートである。因みに、彼はラントグレーベ門下

- の一人、フッサール空間論の代表的な研究書『フッサールの空間構成の理論』(Husserls *Theorie der Raumkonstitution*, 1964)の著者であり、筆者の留学当時、カント『純粹理性批判』を使った講義をしていた——の第一節を加筆訂正したものである。
- (2) この表現は、前掲の“*Persönliche Aufzeichnungen*”(S. 296)に見られる。
- (3) 小論では、これまで“*transzendental*”を「超越論的」と訳して来たが、以下、カントの議論のなかでは「先験的」という訳語を使いたい。と言っても、日本におけるカント研究においても今日一般的になっている「超越論的」という訳語に対して、「先験的」という古い訳語を復活させようというつもりはない。筆者としては、さしあたりここでは、カントの用語には「先験的」という訳語をあて、フッサールが使う同じ語に対しては「超越論的」という訳語をあてて、両者の繋がりを認めつつも、違いを強調したいだけである。
- (4) 『純粹理性批判』からの引用は、慣例にしたがって、A版とB版の頁数を本文中に示した。『プロレゴメナ』からの引用は、*Prolog. §10*のように、その節で指示した。
- (5) Vgl. Frege, G., “*Über Sinn und Bedeutung*”, in: *Kleine Schriften*, S. 143.
- (6) 以上の議論は、久保元彦「形式としての空間——超越論的感性論」第二節、第一および第二論証の検討——(『人文学報』第二二二号、一九七七年。現在は『カント研究』創文社、一九八七年に所収)から学んだことをもとにしながら、筆者なりに整理をしたものであるが、ここから先に論じることが、久保から離れて、久保IIカントには「無縁(*trend*)だった」(V, 128; VI, 195)論点を指摘することになるであろう。
- (7) これは、『純粹理性批判』の先験的感性論に対応する『プロレゴメナ』の「先験的主要問題 第一章」の標題である。
- (8) 算術の総合的性格を否定するフレーゲも、幾何学の総合的性格は承認していた。Vgl. Frege, G., *Die Grundlagen der Arithmetik*, S. 99, 101.
- (9) 「非ユークリッド幾何学はなるほど論理的には可能であるが、それらは構成されることはできない。それ故非ユークリッド幾何学は、カントにとってなら数学的存在をもたぬものであり、むしろ単なる思维的産物なのである」(Martin, G., *Immanuel Kant*, 1951, S. 33)。
- (10) Vgl. Kern, I., *op. cit.*, S. 100Rb.
- (11) カントは“*Sinn und Bedeutung*”という表現をフレーゲとはまったく異なる仕方を使ってゐる。例えば、次のよう箇所を参照せよ。「それゆえわれわれはまた、抽象された概念を感性化することすなわち、その概念に対応した客観を直観において示すことが必要である。というのも、このことがなければ、概念は(いわゆる) *Sinn*のないうすなわち *Bedeutung*のないものに留まるだろうからである」

(A240 = B299)° Vgl. auch B149, A155f. = B194f.

(12) 〈経験の可能性〉への問いは先験的感性論に留まらず、先験的論理学にまで及ぶ問いであるのに対して、〈数学の可能性〉への問いは、『プロレゴメナ』の分類によっても、さしあたり先験的感性論にのみ関わっており、先験的分析論に対応するのは、「純粹自然科学はいかにして可能であるか」という問いである。しかし、ここで詳しく立ち入ることはできないので、予想的に語ることが許されるならば、先験的分析論においての〈純粹〉自然科学の可能性と〈経験の可能性〉との間の関係も、先験的感性論において〈数学の可能性〉と〈経験の可能性〉との間に想定されていた関係と類比的に（すなわち、断絶なき相互乗り入れ関係において）考えられているように思われる。

三 直観の空間と幾何学の空間

フッサールの現象学を考察するにあたって、数学の研究が彼の出发点であったことを忘れてはならない。フッサールの関心は数学の領域から始まり、心理学から哲学へとその関心を移していったが、処女作『算術の哲学』から晩年の遺稿『幾何学の起源』に至るまで、数学への関心は（それがどのような形をとるかが問題であるが）生涯失われることはなかった。⁽¹⁾初期の特に専門的な数学の領野に限定された関心は、一九〇〇／〇一年の『論理学研究』から一九二九年の『形式的論理学と超越論的論理学』までに見られるように、狭い意味での数学を包括するような論理学の問題へと拡張されていった。現在刊行中のフッサール著作集には、『算術の哲学』とその補遺を含む第十二巻のほかに、一八八六〜一九〇一年の草稿から成る第二十一巻の『算術と幾何学のための研究』、一八九〇〜一九一〇年の小文を集めた第二十二巻の『論文と書評』などに、論理学の問題へと収斂されていくまでの数学関係の研究が集められている。ここではまず、『算術と幾何学のための研究』を手掛かりに、『論理学研究』以前のフッサールの数学的関心のなかで、空間がどのように論じられているか、を確

認したい。

初期フッサールの数学研究を見渡してみると、算術のための研究と幾何学のための研究の間には、少しトーンの違いが感じられるように思われる。それはどこから来るのかと思いつながら振り返ってみると、次のことに気付く。すなわち、フッサールにとって、算術への関心は、初めの数学的関心を植えつけられた、数学上の師であるヴァイヤーシュトラウス（そして、彼とクロネッカーとの論争）の影響を受けたものであったが、それと比べて、幾何学と空間問題への関心は、むしろ、その後、哲学へと関心を移していった時に師事し、その心理学から多くを学んだブレンターノおよびシュトゥンプ（ブレンターノのかつての学生で、ハレ大学でフッサールがその助手を努めた、『空間の心理学的起源について』の著者）からの影響によって呼び起こされたもの²である。したがって、この時期のフッサールは或る意味では心理学主義の影響下にあったと言われるが、それは幾何学と空間という問題領域においては特に強いと言わなければならない。初期のフッサールが残した草稿「空間についての哲学的試み」(XXI, 261ff.)のなかで、彼がまず「空間についての哲学的問い」を「心理学的」、「論理的」、「形而上学的」という三つの問いに分けながら、心理学的研究に重きを置いている(vgl. XXI, 265)のも、そのような傾向を表していると言えよう。

しかし、とは言っても、フッサールの思索はまったく心理学主義によって支配されていたわけではない。そのことは、空間の問題についても「心理学的な研究」とは別に「論理的な研究」を立てていたことにも既に現れている。そして、そこにおいてフッサールは、心理学的なものに還元されない数学・論理的なもの自立性をそれなりに主張しているように見えるのである。そのことは、例えば、この同じ時期の草稿に見られる、フッサールの非ユークリッド幾何学に対する態度にも現れている。彼は、「幾何学の発展についての歴史的概観」(一八八九/九〇年講義)のなかで、非ユークリッド幾何学について次のように述べている。ユークリッド幾何学の第五公準(いわゆる平行線公準)を別のもの(平行でな

いもの)に置き換えても、「他の定義や公理に対して何ら矛盾を引き起こさないし、諸定理相互間の矛盾も引き起こさない」のであるから、自己のうちに矛盾を含まない非ユークリッド幾何学の可能性が示され、ユークリッド幾何学は無限に多くの可能な幾何学の一特殊例であることが分かった」(XXI, 322)、と。ここでのフッサールは、非ユークリッド幾何学に対して好意的な理解を示していると言つてよい。彼の当時の考えによれば、直観によつて表象できない、という非ユークリッド幾何学への批判は、批判になつていない。確かに、直観は「シンボル」として機能し(XXI, 294)、幾何学的な操作においてそれは理性の補助となる。しかし、幾何学においては純粹に形式的に行われた証明のみが嚴密な証明で、これは直観的な手續きの限界に拘束されてはいない。直観は概念の理論的な妥当性にとつて規準となるものではなく、それゆえ、幾何学において「直観性はまったく非本質的」(XXI, 412)なのである。そして、そうである限り、幾何学は純粹に演繹的に構築できることになる。この地点においてフッサールは、「幾何学を空間直観から完全に解放し、算術と同じ純粹な論理的学問にすることを望んでいる」(3)「公理主義者ヒルベルトに極めて近い立場にいたと言えよう。これは、フッサールのなかで公理主義的な「確定的多様体」(4)としての数学という構想、そしてこのような数学的多様体論の一部としての純粹幾何学という構想となつていくものである。

しかし、このように自立的な演繹の体系としての数学への理解を持ちつつも、フッサール自らはこのような数学的作業に没頭してしまうことのできる数学者・論理学者ではなく、そのような作業において機能している理性そのものへ反省の眼を向け、数学的理性の批判へと向かうことになる。(5)そして、前述のようにカントにならつた「批判」に目覚めるまえに、既にその手掛かりをフッサールに与えていたのが、ブレンターノから学んだ心理学的研究だった。もう一度そこに眼を向け直すと、心理学主義の影響下にあつたと言われる時期の草稿のなかにも、興味深い論点を見出すことができる。フッサールは、ブレンターノにならつて、記述の心理学と発生的心理学を区別し、「記述の心理学が……認識理論にとつて基礎的な

意義を持つている」(XXI, 266)のであり、「記述的分析が発生的分析の基礎である」(XXI, 267)と述べ、そこで、記述的分析から始めることになるが、それを始めるにあたって、フッサールはまず、「空間という用語の多様な意味」(一八九二—三年)を次のように四つに区別している。

- (1) 日常生活の空間、われわれが前学的的に(vorwissenschaftlich)また字間に縁のないこと(außerwissenschaftlich)知っており、あらゆる「外的直観」の根底にある空間(すなわち、直観の空間)
- (2) 純粹幾何学の空間、「幾何学的直観」が関わる空間
- (3) 応用幾何学すなわち自然科学の空間
- (4) 形而上学の空間

しかも、単に区別するというだけでなく、これらの空間の関係を「形成の発生的な段階」において考えている(XXI, 270)。なかでもいまとりわけ着目したいのは、(1)と(2)を区別していることであり、しかも、(純粹)幾何学の空間(2)は直観の空間(1)から「発生」してくるといふ論点である。さきほど、論理的な観点からは純粹幾何学にとって「直観は非本質的である」といふフッサールの主張を見たが、ここ心理学的な観点においては、にもかかわらず幾何学の空間は直観の空間から「発生」してきたのであり、したがって、空間表象の哲学的解明は幾何学の空間に先立って、直観の空間の記述的分析から始めねばならない、とフッサールは主張しているのである。

ここで、カントの非ユークリッド幾何学に対する姿勢が思い出される(前節参照)。前述のように、カントの数学観によれば、非ユークリッド幾何学は「論理的には可能だが、(直観によって構成できないがゆえに)実在的には不可能」ということになろうが、フッサールの非ユークリッド幾何学に対する姿勢は、或る意味でカントと対立的だが、別の意味ではカントの姿勢と似ているとも言える。すなわち、フッサールによれば、前述のように、数学は徹底して自立的な演繹的体系

であり、そこでは「論理的に可能」ということが必要かつ十分な条件であつて、「実在的な可能性(直観的な構成可能性)」は数学にとつて埒外の問題である。その意味(論理学的な意味)でフッサールは、カントのいまのテーゼの前半には肯定的だが、後半には否定的であろう。しかし、他方で、別の意味(心理学的な意味)では、この自立的演繹体系としての非ユークリッド幾何学も、その「起源」について問われねばならない、と考える。ここでは、カントの言う「実在的には不可能」ということがどういふことなのかを問ひ直されることにならう。フッサールは、前述の講義草稿「幾何学の発展についての歴史的概観」のなかで、非ユークリッド幾何学について次のように述べていた。「われわれの空間はユークリッド空間であるのか。ア・プリオリには、非ユークリッド空間もユークリッド空間に劣らずわれわれの空間でありうるだろう。ア・プリオリな根拠からは決定できないのであるから、経験のみが決定できる、……」(XXI, 322)。この文の前半は、「われわれの空間はユークリッド空間であるのか」という問いに対して、論理学的(ア・プリオリ)な観点から非ユークリッド幾何学の可能性を認める文章であるが、後半は、むしろ、ア・プリオリには決定できないその問いは「経験」に委ねられる問題、「経験」の方から(ここでフッサールの考えている心理学的な観点から)説明されるべき問題であることを含意している、と思われる。したがつて、非ユークリッド幾何学を論理的に根拠づける道とは別に、ユークリッド幾何学の起源を「経験」から心理学的に解明する道をもここで既に念頭においていた、と尋ねるべきであろう。

さて、そのような心理学的研究の初めに行われる記述的分析において、直観の空間と幾何学の空間について行われた区別と両者の関係をもう一度確認しておこう。そこで着目したい重要なことは、フッサールが、一方における、「空間に縁のない(außerwissenschaftlich)意識にとつての空間、子供であれ大人であれ、専門家であれ素人であれ、誰もが生き生きとした知覚や想像において見出すような空間」であるところの「直観の空間」と、他方における、「学問的思惟の空間、すなわち、学問に縁のない意識のもつ空間表象の論理的加工による概念的形作物である幾何学的空間」とを区別していること

である(XXI, 271)。そして、後者については、先に論理学的観点から見たときのように、「直観的に表象されとか表象可能とかは言えず、ただ思惟可能であるとのみ言うことができる。すなわち、その単に概念的な表象はいかなる手段によってもそれに対応する直観に移すことができず、それは現実的には遂行されえない直観をシンボリックに指示している」(ibid.)、と説明している。しかし、前述のように、ここでフッサールが自らの課題と考えているのは、この思惟可能性を探究する論理学的研究ではなく、むしろ心理学的研究であり、そして、それはまず、直観の空間の記述的分析から始めて、その「論理的な加工」による幾何学的空間の形成を説明する、すなわち、「外的直観において知覚される経験的な空間形成物の理想化(Idealisierung)」(XXI, 285)とも呼ばれる、「直観の空間からの純粹幾何学の発生」(XXI, 406)を説明することである。ここに、「前節で述べたカントの空間論の枠組み、すなわち、「経験の可能性と数学の可能性が重なるようなところで問題を立てる」という枠組みとははつきり異なる枠組みをもった空間論の構想が打ち出されている、と云うことができよう。

しかし、ここで打ち出されたフッサールの構想は、今も見てきたように、そこでは論理学的な研究と心理学的な研究が互いに干渉しあわないままに並列された状態になっていることもあり、彼はこれらの研究に決して満足していなかった。確かに、この論理学的な研究からも心理学的な研究からも、後に、異なる連関のなかで新たな装いのもとに再び活用されることになる考察は少なくない¹⁰⁾。にもかかわらず、彼は一九〇六年のノートにも、「私は一八九四年に空間の現象学に取り組み始めて様々な試みをしたが(まったく役に立たないものではあるが)、それには欠陥がある」と記している。そのときに計画されていた「空間の書」のための初期の予備作業は、使いものにならない、すなわち、哲学的な観点からする「空間の現象学」として使いものにならないというのである。では、何が欠けているのだろうか。そこに欠けているのはまさに、同じノートのなかで語り出されている「理性の批判」であり、しかもそれはこれまでの論理学的研究のみならず、

心理学的研究にも向けられねばならないものであり、それこそフッサールをして現象学的還元思想へと導いていったものである。こうしてわれわれは小論の第一節「フッサールによるカント批判」で触れておいた一九〇七年夏季期の講義「現象学と理性批判の主要部」すなわち『物と空間』の地点まで辿り着くことになる。

前述のように、この講義全体の序論として「五講義」において現象学的還元の思想を述べた後、フッサールは改めて本論に取り掛かるまえに簡単な序論を追加している。それは「自然的経験の世界と学問的理論の世界」と題されているが、これはいまのわれわれの脈絡からして重要なものである。そこでフッサールはこれからの講義のねらいについて述べているが、なかでも注目したいのは、第一に、それが「やがて来たるべき経験の現象学の基礎的な部分」にあたること、第二に、それが「最も身近にある第一の端緒から出発して、そこからできるだけ深く広く導くような、経験所与の、しかも少なくともその低次の形態と段階における経験所与の本質の解明」を目指していること、それゆえ第三に、かつては自ら講義の標題に使っていた「認識の理論」という言い方に対しては、「数学的自然科学的説明や基礎づけにふさわしい理論」という表現への疑念を抱いており、「自然科学的現実の構成の問題を……解決するためには、論理的数学的思考の立てる問題の解決とともに、経験認識の側においては、……通常の意味でのあらゆる論理的間接的な認識に先立つ低次の段階の経験の解明が必要である」こと、である(XVI, 3f.)。ここではつきりフッサールは、「下から」、「低次の」「経験の世界」から分析を始めるべきことを主張しているのである。「世界は自然的な把握にとつてさしあたり学問に先立って呈示されていて、あらゆる経験諸科学はこの世界にあとから関わっていくのである」のであり、それゆえ、「自然科学者が基礎づけようとするあらゆる現実判断は、端的な知覚と想起に連れ戻され、この端的な経験において最初の所与に至るような世界へと関係づけられている」のであり、また、「学問が行うようなあらゆる間接的な基礎づけは、まさに直接的な所与に基づいている」のであるから、われわれは「下から、すなわち、低次の通常の経験から始めることができる」(XVI, 7)、とフッサールは

述べている。あるいは、もっと強く言えば、「下から始めなければならない」と言うべきであらう。

ここで、二つのことが注意されねばならない。第一に、フッサールのここでの主張は、それに先立つ「五講義」で現象学還元を述べた後、出てきているという点である。すなわち、ここでの「自然的経験の世界と学問的理論の世界」との関係についての議論は確かに、先にみた初期草稿での「直観的空間と幾何学の空間」の区別と「発生」的關係という考えを或る意味では継承するものと言える。しかし、いまフッサールが問題にしようとしているのは、現象学的還元後の記述的分析であり、それはかつて心理学主義の影響下にあった初期草稿で発生的心理学的な関心から構想していた問題とは質を異にしていると言わねばならない。一九一一年刊の『ロゴス』論文「厳密な学としての哲学」では、それを次のように述べている。「この数世紀しばしば語られてきた〈起源の問題〉は、これを背理的なものに転倒する誤った自然主義から解放されれば、現象学的な問題となる。こうして、空間表象、時間表象、……などの〈起源の問題〉は、現象学的な問題なのである」(XXV, 36)。更に、一九一三年刊の『イデーニー』は同じことを次のように述べている。「空間表象の起源」の問題(その最も深い現象学的意味は決して捉えられたことがない)は、そこにおいて空間が直観的に呈示され、諸現出……の統一として、構成される。ような、あらゆるノエマ的(ないしノエシス的)な現象の現象学的本質分析に還元される」(III/1, 350f.)。それはもはや「心理学的起源」の問題ではなく、現象学的還元を経た後の「現象学的起源」の問題なのである。フッサールは還元「超越論的転回」によって「心理学的起源」の研究を「現象学的起源」という超越論的次元の問題へと改造していったのである。⁽¹³⁾

第二に注意すべき点は、この超越論的転回を実行する現象学的還元という方法が「五講義」で提示された後、この還元に基づく具体的な分析にあたって最初に掲げられたのが、「自然的経験の世界と学問的理論の世界」という対比において「下から(つまり、前者から)始める」という論点だったということである。この「自然的経験の世界」の根源性という考え

は、『イデーニー』のなかにも見られる論点であり、そこでもフッサールは、「物理学的思惟は、自然的経験という基盤の上に確立される」(III/1, 113)と述べ、物理学的な物とは、知覚された物の「単に主観的」な性質を捨象することによって物理学的思惟がそこから取り出して仕上げたものに過ぎない(III/1, 114)、と述べており、そうした脈絡からまた、「物理学的な空間は有体的(Leibhaft)な知覚空間ではありえない」(III/1, 82)とも述べていた。しかし、ここでは自然的態度に対する現象学的還元を「デカルト的な道」において説明したために、この自然的経験の世界を「廃棄」してしまうかの印象を与えてしまい、自然的経験の世界の根源性という論点は覆んでしまっていた。そこにフッサールの本来の意図があったわけでないことは、『イデーニー』に続いて出版される筈だった『イデーニーII』がむしろ『物と空間』の延長線上にある研究を継続していることから窺うことができよう。その意味で、『現象学の理念』(五講義)は『物と空間』によって補われねばならないのと類比的に、『イデーニー』も『イデーニーII』によって補われねばならないのである。

また、この第二の点こそ、フッサールの「厳密な学としての哲学」という構想を支えていたものであった。『厳密な学としての哲学』でも、「自然主義を原理的に間違った哲学として認識することは、厳密な学問としての哲学という理念を、すなわち、下からの哲学、という理念を放棄することを意味しない」(XXV, 41)と述べ、「下から築きあげられ、確実な基礎にもとづき、厳密な方法にしたがって進展するラディカルな学問」(XXV, 57)としての哲学の必要性を説いている。フッサールはまた、「哲学とはその本質からして真の始原(Anfänge)、根源(Urspringen)、万物の根元(リゾーマタ・パントーン)についての学問である」(XXV, 61)と述べ、現象学こそまさにそのようなものとして「起源」についての学(III/1, 122)であるとも述べており、「下から」というときの「下」とは、先述のような現象学的な意味での「起源」を指していたのである。

しかし、この第二の点がいま小論の課題にとって何より重要なのは、この「下から始める」という論点が、以後一貫し

てカントに対する批判の論点を形成していくからである。すなわち、「カントの構成理論は余りに高次の段階から始まる」が、現象学的研究は下から始めなければならない、というのは、以後フッサールがカントの方法を批判するさいに度々使う論点でもある。例えば、一九一二年に執筆された『イデーニイ』のための草稿には、こう述べられている。「低い経験段階の構成……それはカントが捉えていなかった課題である。……これらすべてがカントにとって無縁(Fremd)なものであった」(V, 128)。また、『イデーニイ』の手沢本に後から付けられた注意書きには、次のように記されている。「経験世界の真なる存在は学問の可能性の条件の相関者であり、学問の可能性の条件は必然的に満たされざるをえず、それゆえ、経験は任意の仕方で行うことはできず、それは学問を可能にする仕方ではか進行することはできない、と人は言うかも知れない」(III/2, 496f.)。これは、前節での言い方を使えば、「経験の可能性への問いと数学の可能性への問いが重ね合わさる」ところで立てられたカントの先験的問題と言つてもよからう。ところが、フッサールは続けて言う。「それに対してわれわれはこう答える。この本質的にはカント的な思想はなるほど重要であるかも知れない。……〔しかし〕経験の、カント的な概念を根底に置いてはならない。そうではなく、前理論的な経験の概念を、そして何よりもまず前学問的な生において現に体験されているような、調和的に進行する知覚の概念を根底に置かねばならない」(III/2, 497)。

ここに、フッサールがカントの超越論哲学を改造するにあつたの最も根本的な方針が浮かび上がつて来る。一九〇八年に執筆された(らしい)「私の超越論的現象学とカントの超越論哲学との対決」と題された草稿には、次のように記されている。

カントは認識と認識対象性の相関の真の意味に、従つてまた「構成」の超越論的問題の意味に突き進まない。このことはすでに先験的感性論において示されている。すなわち、そこでは彼は空間と時間を「感性の形式」とみなし、幾何

学の可能性を保証したと信じている。単なる「感性」のうちでは、すなわち我々の意味での現出に先立つて、つまり先験的分析論が初めて扱う「綜合」に先立つては、空間性の構成は何も与えられえないにもかかわらず、である。私が言っているのは幾何学の空間ではなく、ちょうど、日常生活の事物が自然科学的事物規定と自然科学そのものの前提であるように、幾何学の前提になっているような単なる直観の空間である。(VII, 386, 1908)⁽¹⁵⁾

ここにフッサールによるカント超越論哲学の改造のための根本的な方針は明らかであろう。すなわち、カントは「幾何学の空間」と「直観の空間」を区別しなかったため、「直観の空間」を論じているつもりで「幾何学の空間」の議論を持ち込んでしまっていた。空間の問題を扱うためには、まず、この両者を区別し、「下から」「すなわち」「直観の空間」から明らかにし、その後初めて、そこから「幾何学の空間」がどのようにして「発生」したのか、を明らかにせねばならない、というのである。

(1) 『算術の哲学』は、心理学主義の影響のもとにある「心理学的起源」の探究というバイアスがかかっているとはいえず、晩年の「幾何学の起源」にならって、「算術の起源」と呼ばれてもおかしくなかった。とすれば、「算術の起源」から「幾何学の起源」まで、フッサールの生涯は、〈数学の起源〉の問題に捧げられていたと言っても言い過ぎではなからう(もちろん、問題はその「起源」をどう解するかに懸かっているのである)。

(2) Vgl. Strohmeier, I.; Einleitung in: Hua, XXI, S. XLVII.

(3) これはフレーゲがヘルベルト宛の書簡でヘルベルトの立場を評した言ひ方である。Vgl. Frege, G., *Gottlob Freges Briefwechsel* (Hrsg. von G. Gabriel et al.), Ph. B. 321, S. 14.

(4) 幾何学における「空間直観と呼ぶことのできる、論理的源泉とはまったく異なる認識源泉」の役割を重視して、非ユークリッド幾何学に対して否定的な態度をとったフレーゲと比べると、ここでフッサールは、ヘルベルトに極めて近い立場にいたことになるが、「ゲッ

- ティンゲン大学において一瞬触れ合ったかに見えた両者の軌跡は、やがてヒルベルトは『形式主義』へ、そしてフッサールは『超越論的現象学』へとその歩みを大きく異にすることになる³、という点については、野家啓一「幾何学の基礎」と現象学——ヒルベルト、フレーゲ、フッサール」(『現象学年報』三 現代科学と現象学)一九八七年、三五頁)を参照。
- (5) 「確定的多様体」については、渡辺二郎訳『イデーニーII』の詳細な訳注(三七六頁以下)を参照。
- (6) この点については、渡辺二郎「フレーゲ対フッサール、ラッセル対ハイデッガー」(前掲『現象学年報』三、一八頁)を参照。
- (7) この「理念化」という用語が『危機』で重要なタームになることは、周知の通りである。
- (8) 後に見るように、このような心理学主義の影響下において企てられたフッサールの構想は、やがて「超越論的転回」を経て、更に「発生的現象学」へと突き進んだ、晩年の「幾何学の起源」におけるフッサールの構想の萌芽を示すものと見なすこともできる。「算術の哲学」が収録されたフッサリアーナ第十二巻の編者L・エーライは、「これらの作品『算術の哲学』ほか)のみが、『危機』書におけるフッサールの問題である、『普遍学』の生世界的基礎づけを理解せしめる」(Hua. XII, S. XVII)と述べているが、いま見えてきた第二十一巻に収録された幾何学のための草稿についても同様に、これらの草稿のみが「幾何学の起源」における生世界的基礎づけを理解せしめる、とすることができよう。
- (9) 晩年のフッサールの『形式的論理学と超越論的論理学』も、「第一篇 客観的形式的論理学の構造と範囲」の「主観欠如のプラトン主義的数学観」と、「第二篇 形式的論理学から超越論的論理学へ」の「主観に關係した構成主義的数学観」という二つの立場の「緊張の場」で展開されると評される(前掲注(5)の渡辺二郎による訳注三八〇頁参照)が、この「緊張」の萌芽はここにあると言える。しかし、この晩年の著作においても二つの立場が「対立し合い、この対立が全篇を覆う」と言うべきかどうかは、なお検討の余地があるように思われる。
- (10) 同じ時期の草稿のなかでも、「空間表象の起源への問いにおいて重要な点を解明するために、多様体論からの重要な洞察が必要となる」(XXI, 403)と述べている。
- (11) Husserl, "Persönliche Aufzeichnungen", p. 298.
- (12) 第一節でも触れたように、一九〇六/〇七年冬学期の講義ではまだ「認識理論」という語を使っていた。
- (13) フッサールは一九一六/一七年の草稿で、「心理学的起源」と「現象学的起源」の違いについて考察している(XIII, 346ff.)。その欄外注でもすでに「静態的現象学」と「発生的現象学」の区別が示唆されているが、やがて、特に一九二〇年代になって「発生的現象学」という構想が前面に出てくると、「起源」の問題もまた「発生的現象学」の問題として深化されていくことになる。例えば、『デカルト的

省察』のフッサールは、次のように述べている。「ここで、空間表象、時間表象、……などの心理学的起源という古くから知られた問題が思い出されよう。現象学においてはそれらは超越論的な問題として、志向的な問題という意味をもって現れる。しかも、普遍的な発生の問題に組み入れられるものとしてである」(I, 110, vgl. auch 170)。しかし、いまはこの「発生の現象学」の問題にまで立ち入ることはできない。

(14) Seebohm, *op. cit.*, S. 188. ケルンが次のように述べるのも、この同じ論点に他ならない。「カントは前学問的な自然、あるいはもつと広く言えば、普遍的な直観的生世界を彼の構成的研究のテーマとしなかった、ということがこの時期のフッサールが繰り返したカント批判であった」(Kern, *op. cit.*, S. 86)。

(15) 同じ主旨のカント批判は至るところに見られるが、二〇年以上を経た後の一九二九年刊の『形式的論理学と超越論的論理学』からもう一つだけ引いておこう。「彼〔カント〕の超越論的問題は……あらゆる超越論的研究の原初的地盤(Urboden)、すなわち現象学的主観性 の地盤の上に立っていない。……それゆえラディカルにやろうとするならば、彼〔カント〕は問題をさしあたり、前学問的な自然の問題と学問的な自然の問題とに分けなければならなかったであろう。そして、彼は(ヒュームのやったように)まず前学問的な自然——専ら経験的な直観において与えられる(それゆえ、カントの意味での「経験」においてではない)——にのみ超越論的な問いを向けていたであろう」(XVII, 272)。

結びにかえて

さて、われわれは、経験の可能性への問いを数学の可能性への問いと重なるようなところで立てていたカントに対して、フッサールは直観の空間と数学の空間の違いとその発生的関係を初めから強調しており、そこからしてフッサールが、経験の解明にあたって前学問的な日常的な知覚の次元ではなく学問的な認識の次元から始めてしまった、とカントを批判するのを追跡してきた。ここまで来れば、もはや、「カントの暗黙の前提としての生世界」という『危機』に見られるカント批判までは、あと一步であろう。フッサールがカントから「超越論的」という思想を継承しつつも、それを改造していった

ことの核心はここにあった、すなわち、「超越論的」な問題が明らかにされるべき場面を生世界の次元へ求めていったこと
にあつたのである。しかし、小論が明らかにすることができたのは、その基本的な方針だけであつた。小論が明らかにし
ようと思つていた問題は、もともとその先にあつた。すなわち、そのような「超越論哲学の改造」の根本的な方針がフッサ
ールの「空間の現象学」において具体的にどのような帰結を導くことになつたのか、それを明らかにすることこそ、（第一節
でも予測的に語つておいたように）小論の目指していたことであつたが、われわれはいま、ようやくそれを解明するため
の入口に立つたところである。このような改造こそが、空間の問題を「原身体 (Urbild)」と「パースペクティブ」において
解明し、そして、そこから更に空間を「他者」の問題との繋がりにおいて考察するフッサールの「空間の現象学」を可能
にしたのであるが、それをカントの空間論と比較しながら解明するという、本来小論で目指されていたことについては、
もはや、稿を改めて論じるほかない。

付記 本稿は、平成五年度文部省科学研究費補助金（一般研究（C））による研究成果の一部である。